

Title	話者役割理論の構築に向けての基礎的研究 : 小集団会話コミュニケーションにおける話者の独自性の検討
Author(s)	藤本, 学
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46622
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	藤本 学
博士の専攻分野の名称	博士 (人間科学)
学位記番号	第 19963 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	話者役割理論の構築に向けての基礎的研究：小集団会話コミュニケーションにおける話者の独自性の検討
論文審査委員	(主査) 教授 大坊 郁夫 (副査) 教授 釘原 直樹 教授 中村 敏枝 教授 足立 浩平

論文内容の要旨

話者にはそれぞれ特有の会話行動パターンがある。たとえば、話し合われているトピックについて深い知識を持っている人は、自らの知識を披露し、他の参加者の発言にも有識者として評価やコメントを行うであろうし、知識は無くともトピックに興味を持っている話者であれば、そのことに詳しい人物に質問を投げ掛け、また他者の発言に対して自ずと相槌を挿むであろう。このような話者によって異なる会話行動パターンの背景として、本論では話者役割という新しい概念を導入した。

前探索的研究 (第 2 章) として、小集団会話コミュニケーションに関する知見を得るために、同輩集団が日常生活における相互作用を通して、どのように集団構造を発達させ、また、関係形成が会話コミュニケーションにどのような影響を及ぼすのかについて、実験室における会話コミュニケーション実験を実施した。そして得られた知見から、「話者は会話コミュニケーションにおいて機能する上で、自らの個人特性や集団でのソシオメトリック・ステータスの構造、会話の状況に応じて自発的に話者としての役割を取得し、それに応じた発話行動を行う」という探索モデルを立てた。

次に、この探索モデルを検証するために、初対面の 3 人による会話 (第 3 章) と既知の 5 人による討論 (第 4 章) に関する実験を行った。発話の叙述形式と会話展開への貢献の両側面から、話者の会話行動パターンを抽出することを試み、抽出されたパターンと諸要因との関連性について検証を行った。さらに叙述パターンと会話行動パターンから、会話行動の背景として仮定した話者役割の特定を試みた。その結果、司会・話し手・聴き手の 3 要素が得られた。しかしながら、探索的実験では、会話行動パターンと個人特性との関係は明瞭ではなく、またソシオメトリック・ステータスの影響も希薄であった。その原因のひとつとして、既存のコミュニケーション・スキル尺度が、スキルの一側面に特化したものであることが考えられた。そこで第 5 章では、基礎から応用にわたるコミュニケーション・スキルを測定する尺度 ENDCORES を作成した。また、もうひとつの原因として、能力と行動に直接的な因果関係を仮定していることが考えられた。そこで、個人特性と会話行動パターンの間に、それらを媒介する会話スタイルを仮定し、「話者は自分の能力に応じた会話スタイルで会話に臨み、それに応じた会話行動パターンを表出する」という仮説モデルを立てた。仮説モデルのキー概念となる会話スタイルが、コミュニケーション参与スタイルであることを第 6 章において明らかにし、それを測定する尺度 COMPASS を作成した。

既知の5人集団による討論実験(第7章)を実施し、探索的実験により確立した分析パラダイムに従い、会話行動パターン抽出を行うとともに、これまでの知見を統合した会話行動の生起プロセスに関する仮説モデルの検証を行った。その結果、叙述パターン・会話展開パターンともに第4章と似たパターンが抽出され、それらはコミュニケーション参与スタイルやソシオメトリック・ステータスの影響を受けることが明らかとなった。これらのパターンから会話行動の背景となる話者役割として、主導的話者、管理者、話し手、聴き手を同定した。主導的話者と管理者は、第3章において特定された司会が、会話への主体性によって分化したものである。

狭義の話者役割理論は、会話行動モデルのコミュニケーション参与スタイルと実際の会話行動のメカニズムをグループ・ダイナミクスの視点から説明するものであるが、この話者の会話行動傾向を規定するメカニズムに話者の個人特性までを含めた会話行動生起モデルは、包括的な話者役割理論ということになる。検討の結果、会話行動生起モデルの各コンポーネント間の関係が確認されたことから、話者役割理論が支持されたことになる。

本論は、話者役割理論の中核となる基礎的研究である。すなわち、話者の会話行動を説明するものとして、話者の個人特性である話者役割取得傾向や、会話行動パターンの背景となる話者役割の要素を、特定したにすぎない。話者役割理論は、静的研究(話者役割と取得傾向)、動的研究(分化プロセス)、集団行動の研究(集団内話者役割構成)という3研究により構築されると考えている。したがって、話者役割理論の構築に向けた次のステップは、本論により得られた知見を基に、話者役割の分化プロセスを明らかにすることにある。さらに、明らかになった分化プロセスを基に、会話参加者の話者役割構成によるパフォーマンスの説明可能性について検討することが、その次のステップとして考えられる。

論文審査の結果の要旨

申請者は、「話者は会話コミュニケーションにおいて機能する上で、自らの個人特性や集団でのソシオメトリック・ステータスの構造、会話の状況に応じて自発的に話者としての役割を取得し、それに応じた発話行動を行う」ことに着目し、個人要因、状況要因を組み合わせた研究枠組みを話者役割理論としてまとめていきたいという発想からコミュニケーション研究を展開している。そのために、(1)静的研究：話者の会話行動の独自性、(2)動的研究：話者役割取得プロセス、(3)集団研究：話者役割構成が集団パフォーマンスに及ぼす影響、の3段階の研究プロセスを経て確立すると想定している。本論文はこの研究プロセスのうち、(1)の話者の会話行動の独自性の特定と、個人特性との関連性について検討したものである。

話者の会話行動の独自性として会話行動パターンの特定を行っている。その際に用いられた分析パラダイムには、試行錯誤ながら工夫が見られる。多側面から発話を捉えることでコーディング・パラダイムの欠点を補い、それにより得られたデータを複数の統計的手法を組み合わせることにより、筆者が話者役割と呼ぶ会話行動の背後にある会話行動傾向を特定することを目指している。また、会話データの分析にとどまらず、対人関係を分析する手法としてソシオプロフィール法を考案したのに加え、社会的スキルの下位概念であるコミュニケーション・スキルを階層構造に整理統合し、また、発話スタイルについて、会話への参与姿勢という切り口から、コミュニケーション参与スタイルを同定している。これらの研究アイデアとそれにより得られた諸成果は、今後この分野の研究者にとって示唆する点があると思われるとともに、スキル・トレーニングの一つの根拠となり得るものであり、実践的な価値を持つものと期待される。

本論文は3部8章から構成されている。第1部では、第1章において研究の論文の基礎となった“メンバーシップ”という視点を導入し、第2章において継時的な事例研究を行い、小集団内の対人関係と集団構造を明らかにするソシオプロフィール法を考案している。この分析方法を用い、同輩集団のソシオメトリック構造とコミュニケーション構造の推移について明らかにすることで、それ以降の実験の探索仮説となる知見を抽出している。探索研究である第2部、第3・4章において、関係性や課題を操作した小集団会話コミュニケーション実験を実施することで、会話行動パターンの抽出を行い、さらにこれらのパターンを生み出す話者役割の要素を帰納的に特定している。また、第5・6章において、質問紙調査を実施している。会話コミュニケーション行動に関連する個人特性や行動傾向について検

討することで、第5章においてコミュニケーション・スキルに関する統合尺度である ENDCORE を、第6章においてコミュニケーション参与スタイルを測定する COMPASS を、それぞれ作成している。第3部、第7章において、これまでの研究プロセスで得られた知見・要因を包括した小集団会話コミュニケーション実験を実施し、会話行動生起に関する仮説モデルの検証を行っている。第8章において、第7章の検証結果を総括し、話者役割の要素、会話空間システム、会話行動生起プロセスについて考察している。

複数の実験や調査を精力的に行い、多くの要因が関与する会話コミュニケーションについて、得られた知見から適宜必要な要因を絞り込み、当初の目的である話者の会話行動の独自性を特定に向けて、実験および調査が一つの流れとして展開されている。ただし、会話コミュニケーションには多くの要因が関与している以上、今後は本論文で扱っていない要因について検討を進めることで、本論文の成果の更なる一般化を進める必要がある。また、冒頭および著者が論文中で述べているように、本論は話者役割理論の3段階のうち最初の研究プロセスである。したがって、この基礎的研究の成果を踏まえて、今後、動的研究、集団研究へと発展させていく必要がある。本論文の研究成果は説得力があり、さらに、関連する研究に示唆するところの多いものである。また、得られた成果および申請者の研究への取り組みから、今後の更なる研究展開が十分に期待されるものと考えられる。

多様な研究の展開、理論的統合の調和のとれた論究は、博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定された。